

動機づけ的未来展望と進路成熟度

永田 正明

第一工業大学 共通教育センター

要旨

時間的展望研究領域では、関連変数との相関を検討するものは多かったが、個人の行動を説明するために、先行要因としての機能・動機づけ的な作用を検討することは少ないように思われる。本研究では、専門系高校生の進路計画や就職活動といった現在の自分の行動について、そこに時間的展望が動機づけ的に作用しているのか確認することを目的とした。

質問紙調査を行った結果、2年次から3年次にかけて進路成熟態度である「進路自律度」、「進路計画度」、「進路関心度」の3尺度とも有意に平均値が上昇していたが、1年生から2年生にかけての変化は見られなかった。また、2年次から3年次にかけて、時間的展望尺度の「未来」と「目標指向性」得点は有意に上昇していたが、1年次から2年次にかけては有意な得点上昇は見られなかった。仮に1年次から2年次にかけて「未来」や「目標指向性」得点の上昇が認められていたら、3年次の進路成熟態度得点上昇に先行することになるので、未来展望が進路成熟態度に対して動機づけ的に作用した可能性があると考えられるのかもしれない。

Key Words : 進路成熟度 動機づけ的未来展望

1. 1 はじめに

進路指導の目標は、児童生徒の進路発達や進路成熟を促進することであるとされている。このような進路指導の目標達成には、進路発達や進路成熟の実態を正確に把握しておく必要がある。そのためには、児童生徒の進路発達や進路成熟を正確に測定評価する必要があると思われる。

高校生にとって最大の発達課題は進路問題であり、否が応でも進学か就職かの選択を迫られると同時に、その具体的進路先を遅くとも3年次1学期までには決定して進まなければならない。ところが時として、様々な外的問題要因も加わり自分の進路先を決めきれずに「進路先未定」にしておくような自分の人生設計ができない生徒が多くいるのも事実である。進路選択には自己を見つめ直す作業が必然的に生じるとともに、教師にはカウンセリング的視点を持った対応も求められるので

はなかろうか。

進路選択をカウンセリングの視点から支える教育的援助をキャリアカウンセリングという(日本進路指導学会, 1996)。この「キャリア」という言葉は単純に仕事とか職業などを指すものではなく、日本語では職業経歴といった言葉に当てはめられるように、明らかに時間的概念が含まれた言葉である(渡辺, 2007)。高校生が現在・過去・未来をどのように認識しているかによって、キャリアの認識も変わってくるし、キャリア教育には生徒の未来展望まで踏まえた対応が重要になるといえる。しかし、高校でのキャリア教育の実践報告は、生徒のコミュニケーション能力や自己効力、自我同一性との関連をあつかったものや、精神的な適応状態との比較を試みた研究などは多く見受けられるが、キャリア教育に時間的展望、すなわち現在・過去・未来といった概念まで含んだ実証的研究はこれまで

少なく、生徒に対する教師の進路指導の課題の一つでもあると考えている。

Frank(1939)が初めて時間的展望(time perspective)の概念を出し、時間性(temporality)に対する態度や過去とか未来との相互作用が、人間の行動に影響を与えたとした。そして、Lewin(1942)は時間的展望を場の理論における生活空間の要素とし、個人の生活空間が現在・過去・未来を含み、個人の時間的展望とモラルの間に密接な関係があるとした。このような時間的展望の理論化の後、1950年代になって、時間的展望の実証的研究が多く行われるようになった。多くはLewinの理論化に基づいたものであり、時間的展望の研究では、研究者が様々な下位概念や独自の測定方法を使用するなど、そこに共通認識がなかった。Wallace & Rabin(1960)も、こういった概念や定義の曖昧さを指摘している。最も一般的な定義は、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」(Lewin,1951)である。そしてNuttin & Lens(1985)は、時間的展望の多様な概念を時間的展望、時間的態度、時間的志向性に分類した。時間的展望とは、extension(拡がり；概念化された未来の時間的長さ)、density(密度；個人が将来に予想する出来事や経験の数)、coherence(一貫性；概念化された未来における組織化の程度)、direction(方向；どの領域に志向性が強いのか)といった構造的な面である。時間的態度(time attitude)とは、個人の過去・現在・未来に対する見方であり、時間的志向性(time orientation)とは個人の思い、行動の方向性であるとしている。

1. 2 自我同一性

Erikson(1959)は、生涯を通しての自我発達過程のモデルを示しているが、そのなかでは青年期を「自我同一性 対 同一性拡散」の危

機の時期とし、同一性の形成を青年期の発達課題としてとらえている。この自我同一性の感覚の一つの側面は、現在が過去に根ざし、過去の上に現在の自分が確実に築き上げられているというような意識と確信であり、このような確信の上に立って個人の未来というものをはっきりと具体性を持って現実的なものとなると示唆している。このような指摘からは、時間的展望の確立という現象が青年期の自我同一性形成の一側面としてとらえられる。なぜなら自我同一性の達成は、過去・現在・未来の時間的な流れの中で、自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つものであるからである(都筑,1993)。都筑(1993)は大学生285人に対し、時間的関連性と時間的態度と自我同一性地位の関連性について、Cottle(1967)の投影法であるサークル・テスト、時間的態度の測定にはSD法による時間イメージ尺度を使用して検討した。時間的関連性の測定には4つの自我同一性地位を利用比較した結果、時間的関連性に関して上位にある同一性達成地位とモラトリアム地位の人は、時間的関連性が高く未来志向的であった。時間的態度に関しては、同一性拡散地位の人は、過去・現在・未来のすべてにおいて最もネガティブにとらえており、逆に早期完了地位の人は最も時間的態度がポジティブであった。同一性達成地位、モラトリアム地位はその中間であった。これらの結果から都筑は、同一性達成地位の個人は、未来に対して最も現実的で計画的な態度を持っていると結論している。

1. 3 未来展望の動機づけの効果

時間的展望の先行要因や現在の適応-不適応との関連をとらえる際に、これまでは1つの側面、特に未来展望の長さという1側面からのみとらえてきた。しかし近年、時間的展

望の機能を、その複数の成分の相互作用に基づくとする指摘がある。Van Calster, Lens & Nuttin(1987)は、未来展望の変数を Vroom (1964)の EIV(expectancy-instrumentality-value)モデルの枠組みでとらえ、勉強の個人的未来の成功に対する道具性と個人的未来に対する時間的態度の相互作用が、現在の勉強のモチベーションと関連を持つことを確認した。南・光富(1990)は、未来展望が複数の成分から構成され、機能するシステムの構造を成すとしている。このように、時間的展望を行動調整効果という観点からとらえる場合に、この枠組みの示唆するものは大きく、これらの観点からすれば、現在の行動に影響を与えるような未来展望の機能は、未来展望のある一面にのみ作用するのではなく、未来展望のいくつかの側面に作用する相互作用を含むことが推測される(杉山, 1995)。

2. 目的

時間的展望の現在の感情・行動への影響に関して、これまでの研究ではそのメカニズムを扱っていない。そして、未来展望の概念はほとんどが状態の研究であり、行動に影響する動機づけの変数としては研究されていないと指摘している。このように時間的展望という概念は、適応状態や行動を説明する変数として概念化されたにも関わらず、その関心は発達的な変化や他の変数との相関関係にのみ向けられ、現在の行動や適応にどのように影響を与えるのかという側面は軽視されてきた。そのため、現在までの研究では時間的展望が現在の行動や適応—不適応に影響を及ぼすメカニズムを十分に説明しているとは言えないのではなかろうか。概観したように時間的展望研究は、適応—不適応に関わる多くの変数が確認されているが、その影響やメカニズムが明確にされない以上、時間的展望研究から

心理的援助に有効な示唆を与えることは難しい。この点について Lessing(1972)は、個人の未来展望をとらえる場合に、純粹に認知的な未来展望である認知的未来展望と、実際に行動を動機づける未来展望である認知—動機づけの未来展望を区別する必要性を指摘している。今後の時間的展望研究は、単に変数間の相関関係のみを検討するだけではなく、人間行動の説明概念としての理論展開を図り、現在に影響を与える未来展望の先行要因や機能、構造を検討することが必要であると考えられる。

本研究ではこのような考え方から、専門系高校生の進路計画や就職活動といった現在の自分の行動について経時的な調査を行い、そこに時間的展望が動機づけ的に作用しているか確認することを目的とした。

3. 質問紙と方法

1)進路成熟態度(坂柳・竹内, 1986)のうち職業的進路成熟に関する15項目。

2)時間的展望体験尺度(白井, 1994)の18項目。

1回目:1998年5月28日

2回目:1999年6月4日

専門系高校現2年生126名、現3年生107名

4. 1 因子分析結果

進路成熟態度についての因子分析結果は3項目を除き(坂柳・竹内, 1986)の抽出した同一因子が確認された。因子名も同一の「進路自律度」、「進路計画度」、「進路関心度」とした。時間的展望尺度についての因子分析結果は、1項目を除き(白井, 1994)の作成した尺度と同一の下位尺度を得た。因子名も同一の「現在の充実感」、「目標指向性」、「過去受容」、「未来」とした。

Table1 各得点の平均値比較

	現2年生 (N=126)			現3年生 (N=107)		
	1年次平均	2年次平均	t 値	2年次平均	3年次平均	t 値
進路自律度	5.65(1.50)	5.71(1.67)	0.28	5.31(1.49)	5.88(1.46)	2.82 **
進路計画度	5.17(2.63)	4.76(2.71)	1.20	4.39(2.53)	6.46(2.48)	6.03 ***
進路関心度	6.43(1.97)	6.87(1.74)	1.87	6.65(1.89)	8.10(1.66)	5.96 ***
現在の充実感	14.81(4.39)	13.28(4.21)	2.83 **	15.11(3.70)	16.08(4.35)	1.76
目標指向性	15.29(4.57)	14.47(4.60)	1.42	14.77(4.60)	16.14(4.80)	2.14 *
過去受容	13.35(3.66)	13.21(3.61)	0.29	13.46(3.37)	13.76(3.49)	0.64
希望	13.88(3.71)	13.74(3.49)	0.31	13.45(3.26)	15.03(3.23)	3.56 ***

注) 各得点は尺度名に対してポジティブなほど高くなる

4. 2 各尺度平均の継時変化

Table 1 から、2年生から3年生にかけて進路成熟態度である「進路自律度」、「進路計画度」、「進路関心度」の3尺度とも有意に平均値が上昇している。1年生から2年生にかけてはほとんど変化は見られない。逆に時間的展望のうち「現在の充実感」は1年次よりも2年次では有意に低くなり中だるみの状態がうかがえる。2年生から3年生にかけて、時間的展望の「未来」と「目標指向性」尺度得点が有意に上昇しているが、1年生から2年生にかけての有意な上昇は見られなかった。1年次から2年次にかけて「未来」や「目標指向性」尺度得点の上昇が認められていたら、3年次の進路成熟態度得点上昇に先行することになるので、未来展望が進路成熟態度に対して動機づけるに作用した可能性があると考えられるかもしれない。この点を明確にするには、2年次6月以降から3年次6月までで学期単位くらいで同様な調査をしてみると見えてくるのかもしれない。しかしこのような計画の調査になると、個人により進路決定時期が異なるので個々人のデータ単位で検討しなければならないだろう。

5. 考察

Table1を見ると、専門系（職業系）高等学校での勤務経験が長い教職員なら経験的に知っているとおり結果が出ている。すなわち高校1年生から2年生前半までは、なかなか自分の将来像を真剣に考えることができず、恐らくそういった卒業後の自分の明るい未来像を描けないで、なんとなく高校生活を過ごす生徒が大半であるということである。そのため専門系高校では、1年次の早い段階で転退学する生徒も多い。冒頭に書いたように高校教職員は生徒の歩むべき道を正しく導くことが大切な業務であるので、1年次からのキャリアカウンセリングにおいて、「進路自律度」や「進路関心度」尺度得点が上昇するような指導も計画的に実施する必要があると考えられる。放課後、学級担任や副担任は、補習授業や部活動あるいは生活指導に追われる毎日であるので、進路指導室へ生徒を順次定期的に訪問させることから始めることも効果的ではなかろうか。学級担任に対しては甘えが先だったり、緊迫感を感じなかったりすることも考えられるので、指導実績の多い進路指導主任や学年主任からの言葉には重みを感じるものと思われる。

Frank(1939)や, Lewin(1942)の古典的な研究以降, 未来展望感は現在の行動を方向づける機能を持ち, 現在の適応と関連すると考えられてきた。そして概観してきたように, これまでの時間的展望研究においては, 抑うつや不安, さらには非行という不適応との関連性が認められている。一般に不適応状態にある個人は, 未来展望がネガティブなものであるという傾向がみられた。逆な見方をすると, ポジティブな未来展望は現在の適応に寄与すると考えることができるのか。こういった点について心理療法の分野では, Shostrom(1968)が, 神経症のクライアントが病的に未来志向的である場合があることを述べており, 未来展望の指標と適応とが一致しない例を出している。臨床心理学からの意見として, 未来志向性のマイナスの影響性も考慮し, 時間的展望に関係なく今を大切に生きることがより効果的であると主張する立場もある。このような個人にしてみると, 未来展望が現在にとっての行動をプラスに調整するものとは考えにくい。このように未来展望は, 個人の適応に対して行動を制御したりモラルを喚起するだけではなく, 場合によっては現在からの逃避という形で現在に対して影響力を持たない, 負の影響を持つこともあると考えられる(杉山,1994)。

このように時間的展望と適応との関連に関しては, 時間的展望の有無や長さ, 希望の有無などのように一側面だけで結論づけることは難しい。時間的展望の現在の行動や感情への影響を考える場合, 影響力の強さや方向性に関係する複雑に絡んだシステムを視野に入れた上で, そのメカニズムを検討する必要があると考えられる。

注記

本論文は日本応用教育心理学会第14回研究大会(1999年10月17日兵庫県教育会館)にて発表したものを加筆修正したものである。

参考文献

- Cottle,T.J., 1967 The circle test : an investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, 31, 58-71.
- Erikson,E.H. 1959 Identity and the Life cycle. International University Press.
- Frank,L.K. 1939 Time perspective. *Journal of Social Philosophy*, 4, 293-312.
- Lessing,E.E. 1972 Extension of personal future time perspective, age, and life satisfaction of children and adolescents. *Developmental Psychology*, 6, 457-468.
- Lewin, K. 1942 Time perspective and morale. In G.Watson, *Civilian morale*, 48-70, Houghton Mifflin.
- Lewin, K. 1951 Field theory and social science. New York : Harper.
- 南博文・光富隆 1990 青年期における未来展望と有能感の関係に関する研究 広島大学教育学部紀要, 38, 241-247.
- Nuttin,J., & Lens, W. 1985 Future time perspective and motivation : Theory and research method. Leuven : Leuven University Press LEA.
- 坂柳恒夫・竹内登規夫 1986 進路成熟態度尺度の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告, 35, 169-182.
- Shostrom,E.L. 1968 Time as an integrating factor. *The course of human life*. New York : Springer Publishing Company, 351-359.
- 日本進路指導学会編 1996 キャリアカウンセリング 実務教育出版.
- 白井利明 1994 時間的展望尺度の作成に関する研究心理学研究, 65, 54-60.
- 杉山成 1995 時間的展望の関連要因に関する研究の動向 立教大学心理学科研究年報, 38, 39-52.
- 杉山成 1994 中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性 教育心理学研究, 42,

415-420.

都筑学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.

Van Calster,K.V. , Lens,W. , & Nuttin,J. 1987
Affective attitude toward the personal future:
Impact on motivation in high school boys .
American Journal of Psychology, 100, 1-13.

Vroom,A.E. 1964 Work and Motivation. John
Wiley and Sons.

Wallace,M., & Rabin,A.I. 1960 Temporal
experience. Psychological Bulletin, 57, 213-236.

渡辺三枝子 2007 キャリア心理学に不可欠の
基本 新版キャリアの心理学キャリア支
援への発達的アプローチ ナカニシヤ出版
1-22.